

伊庭想太郎編(10)

補遺

武揚の涙、漱石『それから』

伊庭想太郎の人物像、時代背景について、書き尽せなかったことが多々ある。そんなあれこれを。

想太郎は箱館戦争のころ、17,8歳の少年だった。箱館の戦場に赴くことはなかったのか。

従軍説もある。例えば、星亨刺殺事件後に出版され

た『江戸の武士 伊庭想太郎』(東台陰士述、日本館刊) (写真) は、想太郎が箱館で兄八郎の最期を看取り、その後も遊撃隊で奮戦したと記述している。

しかし、裏付ける史料は見当たらない。箱館戦争の史料を収集している函館市立博物館からも、彼が箱館に来たことを示す記録はない旨の回答を得た。想太郎の人生を知る上で重要な点だけに、気になる。

刺殺事件を榎本武揚はどう考えたのだろうか。事件後の「東京朝日新聞」に小さな記事が載っている。

「某子爵、向島に榎本子を訪ひて、伊庭の事を語る。子爵『困った事をしたなア』と一言して顔をそむけ、涙を湛ふるのみ」(明治34年6月24日付)

すでに政界を引退していた榎本だが、新政府の要職を歴任した身として、その苦衷を察する外にない。

東京地裁が想太郎の無期徒刑を言い渡した日の4日前、つまり明治34年(1901)9月6日、米国からある悲報が伝えられた。第25代大統領ウィリアム・マッキンリーが無政府主義者の凶弾に倒れた。同14日死去。

米国の歴代大統領では、後の第35代ジョン・F・

ケネディを含め4人が暗殺されている。「刺客はなくなるものであろうか」という子規の嘆きは洋の東西を超えて、今も続く。

◇ ◇ ◇

明治42年(1909)、夏目漱石の小説『それから』が朝日新聞に連載された。自由な生き方を求める主人公の父親は、某藩の武士として維新の戦乱を馳せた経験を持つ実業家である。儒教に感化された頑迷な人物として描かれている。

この父親像と想太郎が重なって思える。想太郎は自らを「世二後レタル人間」と述べた。時代が下って昭和の大戦後、その戦前・戦中派と、戦争を知らない戦後派の世代断絶があった。明治維新後にも似たような状況があったに違いない。

◇ ◇ ◇

歴史に「if」は禁物だろう。それは承知の上で、もし星亨が刺殺されなければという仮定が心によぎる。

星は庶民階層出身の初めての大家政治家だった。ロンドン留学で培った法律・政治の識見、さらに胆力・行動力も卓越していた。存命すれば、大きな業績を果たしたと想像される。首相の座をうかがう存在になっただろうが、権力争奪の手段として、あまりにも金権に傾きすぎた。

星の政治的系譜は、「庶民宰相」原敬に引き継がれることになる。

◇ ◇ ◇

維新後、逆境の徳川家であって、旧幕臣たちが取り組んだのが子弟教育だった。その沼津兵学校から一筋の道が飯田橋の育英塾に通じた。その後身である東京農学校(写真)で初代校長を勤めた想太郎は事件当時、商議員だったが、同校は事件後もその任を解かなかったと伝えられる。東京農大の歴史の重みを思いつつ、想太郎の果たした役割をしのぶ。

